

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26590122

研究課題名(和文) 臨床・教育場面におけるトラブル事例の実践分析～帰属バイアスの相互解消に向けて

研究課題名(英文) Practical analysis of communication trouble cases in clinical and educational situations: Toward mutual dissolution of attribution bias

研究代表者

岡本 雅史 (OKAMOTO, Masashi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30424310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は精神障害や発達障害の当事者たちが直面するコミュニケーショントラブルの原因を周囲の人々との「あいだ」にある関係性の問題として捉え直すことで新しいコミュニケーションケア方策の提案に繋げることを目指した。研究の結果、そうしたディスコミュニケーション状況は、両者の認知機制や感覚の差異と深く関わっているが、そうしたimpairmentとしての障害に対する不十分な理解が、医療制度や教育制度との中で構築された物理的環境等と相まって、本人のdisability状況を作り出すとともに、社会的なhandicapとしてのディスコミュニケーション状況を強化・固定化している可能性が強く示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to propose a new communicative health care method by rethinking some types of communication trouble, which are called in Japanese-made English, 'discommunication,' faced by people with mental illnesses or developmental disorders, as a matter of the relationship between them and their surrounding people. As a result of the research, it has become clear that such discommunication situations are deeply involved in the cognitive and sensory differences between people with communication disabilities and their surrounding people. Moreover, it is strongly suggested that insufficient comprehension of such 'impairments' produces their 'disabilities,' coupling with institutional rigidity of the medical and educational system and the physical environment, which reinforces and fixes those situations as social handicap.

研究分野：コミュニケーション研究、認知語用論

キーワード：発達障害 自閉スペクトラム症 ディスコミュニケーション

### 1. 研究開始当初の背景

従来、精神医療は精神科医師による治療場面にその中心が置かれてきたが、社会心理学者ミシュラーが指摘するように、そこではしばしば「医療の声」によって当事者の「生活世界の声」が抑圧される。一方、大学教育に代表される教育現場においては、広汎性発達障害を抱える学生たちと教職員とのコミュニケーショントラブルが時折問題化し、そこでのカウンセリングもまた、行動療法的・問題解決志向的アプローチが重視され、当該学生の内省や発言・訴えなどは軽視される傾向が強い。そうした背景から、本研究は精神障害と発達障害の当事者たちが直面するコミュニケーショントラブルの原因を安易に障害名や問題行動に帰属させることなく、医療・福祉・教育従事者たちとの「あいだ」にある関係性の問題として捉え直すことで新しいコミュニケーションケア方策の提案に繋げることを目指して開始された。

### 2. 研究の目的

当初の目的は、統合失調症および高次脳機能障害者への医療・福祉場面、四年制大学内での教育場面、という2つの異なる領域におけるコミュニケーショントラブル事例を平行的に捉え、医療・福祉従事者と障害当事者間、および大学教職員と大学生間に生じるディスコミュニケーションへの新しいケア方策を探ることにあつた。特に、非対称な関係にあるコミュニケーション参加者が互いにそのトラブルの原因を、誤った、ないしは不適切な要因に帰属させる 帰属バイアス に着目し、(1)スキーマ・アプローチに基づく具体的なトラブル事例の分析とパターン抽出と(2)認知語用論的なディスコミュニケーション分析に基づいた包括的なコミュニケーションケア方策の立案を想定していた。

しかしながら、研究を進めるなか、トラブル事例数を無闇に増やすことよりも、関係者へのインタビューや談話分析を元にした少数事例の掘り下げと理論的基盤の構築を優先させることへと方針を転換し、理論と実践の相互往復によるディスコミュニケーション研究にその重心を移すこととし、新たなコミュニケーションケア方策立案への指針を得ることを研究期間における目標とした。

### 3. 研究の方法

本研究は、次の3つのテーマに基づいて進められた：

**テーマ1：**コミュニケーショントラブルを生じさせる認知的基盤の理論的解明

**テーマ2：**障害当事者をめぐる地域精神保健実践の人類学的考察

**テーマ3：**臨床・教育場面におけるケア活動の実践分析

テーマ1に関しては、主に代表者岡本が、認知語用論の観点から、障害当事者とそれを取り巻く非当事者との間でコミュニケーショントラブルを生じさせる認知的基盤について、参加者間の立場性、話題の転換、聞き手行動(リスナーシップ)、メタ・コミュニケーション、などの各側面から事例分析を行い、それをもとに理論化を図った。

テーマ2については、主に連携研究者(平成28年度から研究分担者)の松嶋が、医療人類学の立場からイタリアの地域精神保健実践の参与観察に基づいて、本邦の地域精神保健のあり方との比較および批判的考察を行った。

最後のテーマ3に対しては、主に分担者山川と研究協力者の小谷と松岡が中心となって、茨城県と東京都大田区を中心とした障害者ケアの実践例を通して、臨床現場におけるディスコミュニケーションがどのような参加者間の関係性のなかで生じているかの解明に取り組んだ。

### 4. 研究成果

テーマ1では、コミュニケーショントラブルを生じさせる認知的基盤を解明するため、参加者間の立場性、話題の転換、聞き手行動、メタ・コミュニケーション、にそれぞれ焦点を当てた認知語用論研究を主に岡本が実施した。

まず、**1**については、いわゆる「アイロニー」発話が自閉スペクトラム症を持つ障害当事者には理解しづらいという点を重視し、アイロニー発話が言語の「包除性(clusivity)」を利用して会話参加者間の立場性を操作することを指摘し、発達障害当事者にはそうした包除性認知が困難である可能性を示唆した。**2**については、日常会話における話題の転換が、従来説明されてきたような言語的な側面よりも、転換を行う参加者の認知的な側面が実際には大きく関与することを明らかにした。したがって、自閉症スペクトラムの当事者が談話理解の手がかりとすることができる談話標識や接続表現を用いた明示的な転換は定型発達者同士の日常会話では少なく、言語的なマーカーを用いない非明示的な転換を行う傾向が強いことが、定型発達者と発達障害者とのコミュニケーション不全を導く可能性があることと判明した。さらに、**3**については、当事者の「語り」を聞く立場としての援助者の「聞き手行動」に焦点を当て リスナーシップ の認知語用論研究を行った。具体的には、聞き手側の振る舞いが会話の場に対してどのような効果をもたらしているかを知るために、まちづくりワークショップにおけるファシリテーターの聞き手行動の事例分析を行った。その結果、「言い換え」や「要約」などの高度な聞き手スキルが当事者とのディスコミュニケーション解消へのヒントとなるという結論を得た。最後の **4** に関しては、発達障害当事

者と周囲の定型発達者との会話場面における「メタ・コミュニケーション」に焦点を当て、当該概念の認知語用論的再検討を行った。特に、メタ・コミュニケーションが動的な「フレーミング」による「境界づけ」と「方向づけ」の二つの機能によってコミュニケーションの場を多層化し、参加者たちの認知と相互行為のインタフェースとなっていることを明らかにした。さらに参加者間の共有基盤構築に着目し、課題達成対話を始め、研究者間のコミュニケーション場面においても参加者の共有基盤が言語・非言語的手段を用いて構築される様子を詳しく、障害を巡るディスコミュニケーション場面分析に繋がる手がかりを得た。

テーマ2に関しては分担者松嶋を中心として、まずは文化人類学的見地から「出会い」に焦点を当てることで自閉スペクトラム症の生きるリアリティへの接近を試みた。人類学者インゴルドが指摘する、狩人と動物との「出会い」において狩人が自らと動物を不可分な存在と感ずることを踏まえ、自閉スペクトラム症の当事者が人と「出会い」することの意味を、ティンバーゲンによる自閉症児の動物行動学的観察と重ね合わせることで明らかにした。出会いの場面では、健常児であってもよく知らない対人的・対物的状況においては自閉症的症状を示すが、その際には近づこうとする動因と逃げようとする動因の間の葛藤が存在する。自閉スペクトラム症の当事者においても同様の葛藤があるのであって、単に目が合わないとかコミュニケーションがうまく取れないということではないと考えられる。そこから導き出されるのは、当事者に対して言語や社会性に関する特別な訓練を施すよりも、まず怖れや不安のレベルを下げるからこそが第一義的に重要だという結論である。また、「出会い」について現象学的考察を行ったイタリアの精神科医バザーリアの「出会い」とはある直観的な関係性であり、そこにおいて医者と患者それぞれの単一性は溶解し、2つの単一実体の手前にただ一つのものを形成する」という指摘も手がかりとしながら、医療当事者と障害当事者の双方が、自分が相手に拒否されるかもしれないという「不安」と「怖れ」を互いに認めつつ共有するような場をつくるからこそがディスコミュニケーション状況から脱け出るための第一歩であることを明らかにした。

一方、イタリアでの地域精神保健実践および、近年日本でも急速に普及しつつある当事者を中心としたケアについても調査・研究をすすめ、特に障害にまつわるディスコミュニケーション状況へのサポートのあり方の特徴と差異について検討を行った。一例として、北海道浦河町で始まった精神障害者の当事者研究を、その創始者である精神科ソーシャルワーカーの向谷地生良氏を中心とした「べてるの家」のメンバーと共に松嶋がイタリア

で実施しそれについて討議を行った。なかでも障害者が自分自身で病名を付けるという当事者研究の有用性がイタリアの当事者と医療関係者の強い関心を惹き起こし、従来のように統合失調症患者がその診断名を自身のアイデンティティにしてしまうことがもたらす問題の大きさが共有された。同時に、障害当事者とその周囲との対話も、単なる「対話 (dialogue)」というよりも、「弁証法的対話 (dialectique)」にすることこそが肝要であることも確認された。例えば「登校拒否」から「不登校」へ変わること、異議申立ての作用が消失して「多様性」という名の下でより細分化された現状維持の機能が強化されてしまう側面が明らかとなった。これは現在の特別支援学級がもつ根本的な問題点でもある。

このように、障害当事者と非当事者の非対称性を超克するためには、「出会い」や「対話」といった関係的環境上の工夫が必要となる。この点については、イタリアの地域精神保健の他、フィンランド発のオープンダイアログなどの実践を検討した。そこでのポイントは、当事者による自身の障害やトラウマについての語りの宛て先が、聴き手を介して当事者自身に向けられていることの意義である。この点に着目することで、「ナラティブ」が持つ自己再帰的な機能をディスコミュニケーションの問題であると同時にリカバリー（关系的・社会的回復）の問題として捉え直すことが可能となった。

そして、最後のテーマ3については、大人の発達障害の事例検討と、講演による自閉スペクトラム症の基礎的知識の整理、さらに高次脳機能障害者の地域支援の実践分析、医療・福祉現場と教育現場での発達障害対策の比較調査、の各課題に取り組んだ。

については、分担者山川を中心に、医療・福祉・行政などの連携を図るための事例検討会「茨城ケアコンソーシアム」を3か月に1回行った。その中で大人の発達障害の就労についてはハローワーク、障害者就業センターなどからスタッフが参加し、多くの視点から具体的な支援方法についての検討を行った。さらに、成人の発達障害の事例検討を行うとともに、実際にアスペルガー症候群の就労支援例を報告した。

そのなかで浮き彫りになったのは、発達障害を取り巻く様々な問題である。例えば、東京都発達障害当事者会を主催する冠地氏が「発達機会喪失障害」と称するように、発達障害当事者は日常的に人とコミュニケーションしていく機会をどんどん失っていく傾向にある。定型発達者の期待する「これができるなら（言わなくても）これはできるだろう」が発達障害当事者に通用せず、「これができないのに、これはできる」といった事態が、しばしば両者の間のディスコミュニケーションの原因となる。また、発達障害当事者は自己肯定感が低いことが知られているが、

事例検討から明らかとなったのは、当事者本人だけではなく、その周囲の人々の自己肯定感も低くなっている可能性である。例えば、しつけが悪いのかと悩み困っている家族、困っているけど困っている感が出ない当事者本人、限界を感じる医療職、関わりに悩む教育現場、というように、本研究で焦点を当てているディスコミュニケーション場面に関わる全ての参加者に共通して見られる特徴となっている。

また、**【顔の見える連携を継続している】** に関しては、発達障害の支援についての啓蒙活動として、臨床・教育場面で発達障害に関わる相談支援事業所職員、小中学校教員、障害者歯科センター職員などを対象に山川が講演を行い、現場でのトラブル事例を集約した。そのなかで焦点が当てられたのは、一口に発達障害と言っても、自閉スペクトラム症 (ASD) から、注意欠如/多動性障害 (ADHD) まで様々であるが、前者はその定義上、どこからが障害なのかが不明であり、周囲の人々に一貫した対応を求めることが難しいということである。また、ADHD は ASD よりも、一般に人との関わりを求めたがる傾向が強いため、却って周囲とのコミュニケーションにおける失敗機会が多いことも聴講者との議論から明らかとなった。

次の **【知的障害の有無】** は、先天的な発達障害とは異なるものの、後天的な疾病や事故によって高次脳機能障害となった人々に対する地域支援の実践とその分析を通じて、特定の障害カテゴリーを越えたディスコミュニケーション状況の解消策を模索するものである。

まず、研究協力者小谷は、高次脳機能障害者が多く入居するケアホームについて、高次脳機能障害者が地域で暮らすために必要なサービスを調査し、介護施設に勤務経験があり、現在ケアホームに勤務する3名に半構造化インタビューを行い、データを質的に分析した。そして研究協力者松岡は、自身が代表をつとめる蒲田寺子屋を拠点として、大田区の高次脳機能障害者への地域支援活動を継続し、週2度の認知的支援(PCによる文書作成の指導など)を行うほか、大田区家族会の月例会合および高次脳機能障害支援者ネットワークの運営協力を、全研究期間を通じて行った。特に、自身が行う高次脳機能障害者に対するリハビリテーション活動ならびに家族会活動の支援などを通じて、それらの臨床的活動および学術的な知見などから得られた考察をシンポジウムや講演にて発表した。具体的には、高次脳機能障害に関わる地域連携を東京都大田区での活動を元に考察した成果を雑誌論文としてまとめる一方、月1で行われる、家族と当事者の会「たまりば〜」に毎回参加し、会場提供および技術的支援を行った。さらに、高次脳機能障害者をはじめとする支援を求める当事者に対してボランティアで相談支援や行政機関への同行支援などを行った。地域の社会福祉法人や精神障害者の家族会とも会合やイベント等で

顔の見える連携を継続している。

最後の **【医療・福祉場面と教育場面の違い】** に関しては、代表者岡本が、自身の勤務する四年制大学で「特別ニーズ学生」と称される、発達障害を抱えた大学生への具体的なケア活動について、担当スタッフであるソーシャルワーカーからのヒアリングを元に調査を行った。さらに、発達障害の当事者研究を実践する研究者達と意見交換を行い、ディスコミュニケーション研究の可能性を検討した。その結果、明らかとなったのは、以下の点である：

- ・ **【症例の多様性】** 発達障害の実際の症例は統合失調症等と比べてかなり多様である
- ・ **【診断時期の違い】** 自閉症児が大人になった場合と大人になって初めて明らかになったアスペルガーとはかなり事情が異なる
- ・ **【知的障害の有無】** 就労支援に顕著なように、知的障害の有無が一番大きく、成育歴におけるケアの質・量の違いを生ずる
- ・ **【医療・福祉場面と教育場面の違い】** 医療・福祉場面と教育場面では、発達障害当事者がどのように変化して欲しいかという目標が異なる

特に最後の論点が本研究にとって重要な課題として残った。具体的には、医療場面では、発達障害当事者を従来の統合失調症への対応設定に乗せようとしても上手くいかないことが多く、就労支援もその一つとなる。例えばデイケア自体が統合失調症をモデルとして作られていることから、新たなモデルが求められている。一方、大学などの教育場面では、1限の授業に出られないということが結局大学に来られなくなってしまいうことに繋がる連鎖も判明した。例えば e-learning などによる代替手段の可能性はあるが、そもそも高校までと異なり、保健室のような休息空間が大学には存在しないという問題がある。フーコーのいう discipline の一種として、その場にどのような「姿勢」でいるかを制度的かつ環境的に強制されることがそうした問題の背景にあると考えられる。

以上のように、障害当事者と周囲の人々との「あいだ」に生じるディスコミュニケーション状況は、両者の認知機制やさらにそのベースにある知覚や感覚の差異と深く関わっているが、そうした impairment としての障害に対する不十分な理解が、医療制度や教育制度との中で構築された物理的環境等と相まって、本人の disability 状況を作り出すとともに、社会的な handicap としてのディスコミュニケーション状況を強化・固定化している可能性が強く示唆された。こうした知見をどのように現場での制度・環境・コミュニケーションのデザインにフィードバックすべきかについての検討については、さら

なる今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文](計13件)

澤俊二・磯博康・山川百合子・千田直人・伊佐地隆・大仲功一・安岡利一・園田茂・鈴木めぐみ・山田将之・酒野直樹・鈴木孝治・壹岐英正・土屋隆・岩崎テル子・大田仁史、脳卒中者の手部および足部の感覚・知覚機能の継時的変化の推移 慢性脳卒中者の総合的追跡調査研究 発病から1年、金城大学紀要、査読有、18、2018年、137-147

定村美紀子・糸井和佳・松岡恵子・浅見恭史・霜越千裕、地域包括ケアシステムにおける多職種連携により服薬支援の課題、帝京科学大学紀要、査読有、14、2018年、209-213

岡本雅史、課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性、日本語用論学会第19回大会発表論文集、査読無、12号、2017年、275-278

松嶋健、喚起する言葉 人類学的記述をめぐって、臨床精神病理、査読無、38(1)、2017年、83-90

吉川正人・木本幸憲・岡本雅史・佐治伸郎、第38回研究大会ワークショップ 理論研究再考 理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか?、社会言語科学、査読無、19(2)、2017年、87-92

松嶋健、「人間する」ことを学ぶ イタリアの地域精神保健が問うもの、デイケア実践研究、査読無、20(2)、2017年、182-187

岡本雅史、コミュニケーションの「場」を多層化すること メタ・コミュニケーション概念の認知語用論的再検討、社会言語科学、査読有、19(1)、2016年、38-53

松嶋健、異なるものへの開かれ イタリアにおける人類学と精神医学の目に見えぬ協働、こころと文化、査読無、15(1)、2016年、95-97

松嶋健、ダイアレクティブへと生成するダイアログ、精神看護、査読無、19(6)、2016年、557-560

松岡恵子、高次脳機能障害と地域の連携～東京都大田区での活動から、こころの健康(日本精神衛生学会誌)、査読無、31(2)、2016年、31-41

松岡恵子、東京都大田区における高次脳機能障害に対する取り組み～地域から研究へ、研究から地域へ～、均衡生活学、査読有、11(1)、2015年、1-9

### [学会発表](計23件)

岡本雅史、テキストの対話変換実験に基づくナラティブの共話可能性の検討、第20回日本語用論学会年次大会(20周年記

念大会)ワークショップ、2017年

澤俊二・園田茂・伊佐地隆・大仲功一・安岡利一・山川百合子・金田嘉清・才藤栄一・土屋隆・大田仁史、慢性脳血管障害者の総合的追跡調査(第13報)発病10年 片麻痺手の感覚・知覚機能の推移、第54回日本リハビリテーション医学会学術集会、2017年

塩原直美・山川百合子、精神科を長く利用されている方の体力と生活習慣について、第21回日本健康福祉政策学会学術大会、2017年

松嶋健、精神医療とデモクラシー イタリア地域精神保健からの声、吉備国際大学国際講演会(招待講演)、2017年

岡本雅史、課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性、第19回日本語用論学会年次大会ワークショップ、2016年

岡本雅史、コミュニケーション研究の「語り方」:共有基盤の構築と更新に基づく対話可能性に向けて、社会言語科学会第38回研究大会ワークショップ、2016年

岡本雅史、グランド・セオリーなきコミュニケーション研究を補完するものは何か?、HCS+VNV合同研究会、2016年

Takeshi Matsushima, Ecology of voices: How people deal with auditory hallucinations in Japan and Italy, East Asian Anthropological Association 2016 Meeting, 2016年

松嶋健、社会を Manicomio から解放する イタリアにおけるある協働の歴史、日本精神医学史学会第20回大会(招待講演)、2016年

松嶋健、喚起する言葉 人類学的記述をめぐって、日本精神病理学会第39回大会(招待講演)、2016年

松嶋健、反精神医学と非精神医学を超えて イタリア地域精神保健の人類学から、日本社会臨床学会第24回総会(招待講演)、2016年

岡本雅史、コミュニケーションの当事者研究の射程 方法論的問題点を超えて、第9回ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会(VNV)年次大会、2015年

岡本雅史・北野藍子、日常会話における話題の転換を促す認知的要因、社会言語科学会第35回研究大会、2015年

岡本雅史、会話における多相的共有基盤化 参与者間の立場性の変化を促すclusivity、第1回京都語用論コロキウム、2015年

松嶋健、天命反転地域 地域を耕す、希望を耕す、日本精神障害者リハビリテーション学会第23回大会(招待講演)、2015年

松嶋健、「人間する」ことを学ぶ イタリアの地域精神保健が問うもの、日本デイ

ケア学会第 20 回年次大会 (招待講演)  
2015 年  
松嶋健、「文化」としてのリハビリ—イ  
タリアにおける社会協同組合の発明とそ  
の意義、多文化間精神医学会第 22 回学術  
総会、2015 年  
松岡恵子、高次脳機能障がい者を対象と  
した「蒲田ものづくりプロジェクト」を 1  
年間行って～課題と展望～、第 39 回日本  
高次脳機能障害学会、2015 年  
小谷泉・山川百合子・岡本雅史・笹島京  
美・松岡恵子・松嶋健、ケアホームにお  
ける高次脳機能障害の特徴、第 38 回日本  
高次脳機能障害学会学術総会、2014 年

〔図書〕(計 4 件)

奥野克巳・石倉敏明 (編)(松嶋健)、以  
文社、Lexicon 現代人類学、2018 年、224  
(100-103)  
木村大治 (編)(松嶋健)、ナカニシヤ出  
版、動物と出会う I: 出合いの相互行為、  
2015 年、220 (129-150)  
佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳 (編著)(松  
嶋健)、ナカニシヤ出版、世界の手触り  
フィールド哲学入門、2015 年、272  
(129-148)  
Martinez, Gerald M. (Ed.) (Keiko  
Matsuoka)、Nova Science Publishers Inc.,  
Recent advances in language and  
communication、2015 年、200 (151-165)

〔その他〕

\* 山川百合子講演

- 2015/7/8 「発達障害の支援～医療と就労  
の連携」、茨城県精神障害者支援事業者協  
会管理職研修会
- 2015/8/17 「子どもの心の病気～発達障  
害(教育と医療の連携)」、第 2 回県南教  
育事務所指導主事等研修会
- 2015/10/15 「発達障害の支援～医療と就  
労の連携」、福祉法人明清会ほびき園職員  
研修会
- 2016/2/14 「発達障害の理解と支援～精神  
科医にできること」、障害者歯科センター  
研修会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 雅史 (OKAMOTO, Masashi)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号: 3 0 4 2 4 3 1 0

(2) 研究分担者

山川 百合子 (YAMAKAWA, Yuriko)  
茨城県立医療大学・保健医療学部・教授  
研究者番号: 4 0 3 8 1 4 2 0

松嶋 健 (MATSUSHIMA, Takeshi)  
広島大学・社会科学部・准教授

研究者番号: 4 0 5 8 0 8 8 2  
( \* 平成 28 年度より研究分担者として追加)

(3) 連携研究者 (平成 26、27 年度)

松嶋 健 (MATSUSHIMA, Takeshi)  
広島大学・社会科学部・准教授  
研究者番号: 4 0 5 8 0 8 8 2

(4) 研究協力者

小谷 泉 (KOTANI, Izumi)  
松岡 恵子 (MATSUOKA, Keiko)